独立行政法人
労働者健康安全機構　大阪ろうさい病院

Osaka Rosai Chronicle

大阪ろうさいクロニクル

第11号
発行日
2025.1.1

新年のごあいさつ

院　長　平（ひら）　松（まつ）　直（なお）　樹（き）

新年明けましておめでとうございます。心も新たに、今年もどうぞよろしくお願いいたします。年始にあたりご挨拶申し上げます。

大阪ろうさい病院は、2022年元日に新病院として生まれ変わりました。開院後ちょうど３年で外構も完成し、おかげさまで今月無事グランドオープンを迎えます。

60年の時を経て、増改築を繰り返した旧病院が新たな病院となりました。以前から見違えるほど、高度専門医療が拡充され、救急医療を含む急性期医療が充実しました。外観もホテルさながらの素晴らしいエントランスとなり、皆さまにご不便をおかけしていました駐車場も緑化計画のもと大きく拡張されました。こうして誕生した新病院は、ひとえに地域の皆さまからの絶大なるご支援によるものであり、先人たちと職員一人ひとりの絶え間ない努力、そして“ろうさいグループ”全体からの大いなるサポートの賜物であります。心より御礼申し上げます。

今、この時代に、この素晴らしい新病院で診療活動ができることは、私たちにとって、かけがいのない喜びであり、この新たな環境のなかで、これまで病院を支えてきていただいた方々への感謝の気持ちを抱き続けながら、今後なお一層の精進をさせていただく所存でございます。

本年11月に、近畿大学病院（近大病院）が堺市の泉ヶ丘に移転してこられます。当院から南へ約10kmです。近大病院とは、以前より様々な部署で診療連携を行っており、これからも引き続き“共存共栄”を目指してまいります。例えれば、両院の関係は、大手の一流ホテルと古き良き伝統を引き継ぐ老舗旅館のように思います。当院のような老舗病院には老舗病院なりの良さがあります。「誠実で質の高い医療を行い、すべての方々から選ばれる病院に」という基本理念のもと、“お・も・て・な・し”の心を忘れず、なお一層、患者さま本位の医療を続けてまいります。どんな患者さまにも受診を希望していただけるような病院、心のこもった患者さまにとって最善の医療を行う病院、そしてどんなことでも相談できる病院、さらには残念ながら不治の病であっても信頼して安心して心と体を預けていただける病院、そうした病院であり続けていられるよう尽力してまいります。

スタッフ全員がONE TEAMとなり、これからも南大阪の中核病院として、地域の皆さまに愛される病院になれるよう、誠心誠意頑張ってまいります。今後とも、ご支援、ご鞭撻いただきますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

基本理念

誠実で質の高い医療を行い、
すべての方々から選ばれる病院に

基本方針

1．地域と連携し地域に信頼される急性期医療を行います
2．高度で安全な医療に全力をあげてとりくみます
3．患者さまの立場と権利を尊重する医療に努めます
4．勤労者医療を担ってこれを推進します
5．働きがいのある職場づくりを推進します

診療科紹介　循環器センター

特任院長　西野雅巳（にしの まさみ）

皆さま健やかに新春をお迎えのこととお慶び申し上げます。本年１月に大阪ろうさい病院は、60年ぶりの新病院がすべて完成し、グランドオープンを迎えます。職員一同、心を新たにして精進してまいりますのでよろしくお願いいたします。

さて、大阪ろうさい病院「循環器センター」の紹介をさせていただきます。「循環器病対策推進基本計画」が2020年10月27日（火）に閣議決定され、我が国で『がん』に次ぐ二番目の死亡原因となっている循環器病対策のための計画が定められました。しかし、臓器別に考えた場合、がんは多くの臓器に発症しますが、循環器病は脳と心臓が主で、臓器別では死因一位といえます。さらに、健康寿命を脅かす原因疾患としては脳血管疾患を含む循環器病が一位です。そのような背景を踏まえ、大阪ろうさい病院では2023年４月より循環器内科、心臓血管外科、脳卒中・脳神経内科、脳神経外科を含む「循環器センター」を標榜しています。心臓血管領域としては経カテーテル的大動脈弁置換術（TAVI）が順調に増加し、2024年10月に300例を突破しています。当院のTAVIは導入以来、術中死亡、術中開胸術への移行ともにゼロという誇るべき安全性をもって施行できています。また、その他の構造的心疾患（structural heart disease: SHD）インターベンションといわれる、経皮的左心耳閉鎖術（Watchman™留置術）も大阪でトップクラスの症例数を誇り、経皮的僧帽弁接合不全修復術（MitraClip留置術）も順調に増加してきています。さらに、心房細動のアブレーションでは、去年より最新のパルスフィールドアブレーション（PFA）を導入し症例数が増加しています。心臓血管外科ではMICS（低侵襲心臓手術）を積極的に取り入れ、安全かつ有効に施行できています。心臓血管領域では「ハートコール」で24時間急性期治療を行っており、また、脳血管領域では脳神経内科、脳神経外科がブレインチームを組み、「脳卒中コール」を受け付けてtPA治療、カテーテル治療にあたっています。2024年９月23日には美原区において「循環器センター」の啓蒙活動として毎年恒例の「脳・心血管病フォーラム」を開催いたしました（写真）。今後とも循環器疾患予防・治療に大阪ろうさい病院「循環器センター」が地域医療に貢献できるよう邁進してまいりますのでよろしくお願いいたします。

診療科紹介　循環器内科

「不整脈：新たな心房細動治療」

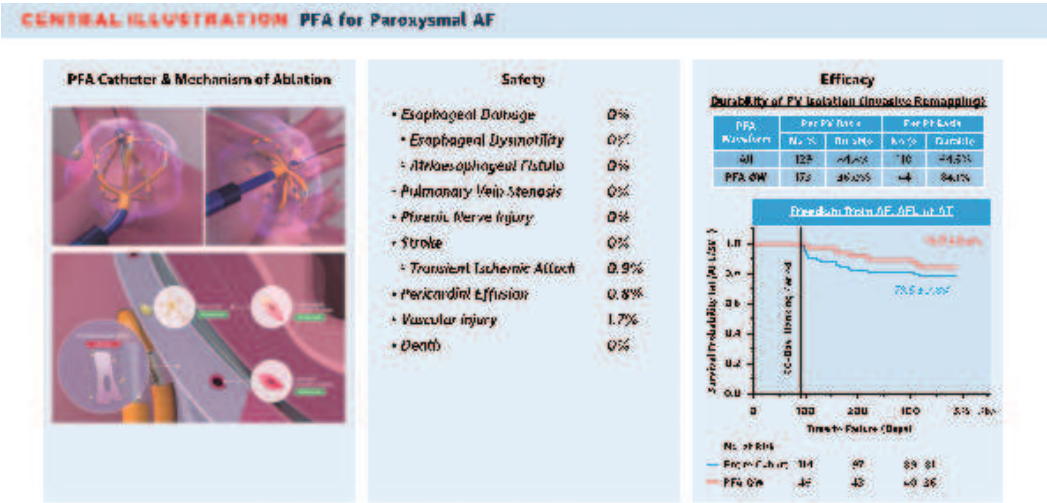
循環器内科部長　江神康之（えがみ やすゆき）

心房細動に対する侵襲的治療は、1990年代にカテーテルを用いた肺静脈隔離術から始まりました。当初、ラジオ波（RF）エネルギーによるアブレーションが主流で、心房細動の主な発生源である肺静脈を左房心筋から電気的に隔離することで，リズムコントロールを目指してきました。その後、クライオバルーン（CB）アブレーションが登場しました。この技術は、冷凍エネルギーを用いて肺静脈を効率的に隔離する方法で、RFアブレーションと比較して合併症リスクが低減し、治療時間も短縮されました。クライオアブレーションは、特に発作性心房細動の治療でRFアブレーションと同様に良好な成績を示し、広く普及しました。しかし、これらの治療には、頻度はそれほど高くないものの、周辺臓器関連合併症（食道関連合併症や横隔神経麻痺、急性胃拡張）や、肺静脈狭窄症といった合併症の発生が問題でした。

最近になり、従来のデバイスよりも安全性を追求したパルスフィールドアブレーション（PFA）が登場しました。PFAは、電気的エネルギー（高電圧パルス）を用いることで、心房筋を選択的（特異的）に治療することが可能となり、従来治療で懸念されていた合併症の頻度を著明に軽減できる点で非常に画期的です。また、治療時間がさらに短縮され、患者さまへの負担が軽減されるだけでなく、従来の方法と同さまの治療成功率を示しています。

このように、心房細動アブレーションの歴史は、安全性と効率性の向上を目指した技術革新の連続で、PFAは、これまでの課題を克服した新たな標準治療として、今後ますます普及していくことが期待されています。当院でも、2024年10月からPFAを導入し、現在までに、多くの心房細動の患者さまに対してPFAを行なっております。超高齢化社会の現在、心房細動の患者さまに遭遇する機会が今後ますます増加することが予想されます。もし、動悸症状でお困りの心房細動の患者さまがおられましたらいつでもご相談ください。

今後も、地域の先生がたと連携し、地域の皆さまに最良の医療を提供するために努力してまいります。今後とも変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。



Reddy, V.Y. et al. J Am Coll Cardiol EP. 2021;7(5):614-27.

診療科紹介　循環器内科

循環器内科部長　江神康之（えがみ やすゆき）

循環器内科は、現在20人体制（西野特任院長、江神循環器内科部長、矢野副部長、松永副部長、岡本副部長、スタッフ９人、循環器専攻医６人）で、虚血性心疾患、末梢動脈疾患、不整脈、心臓弁膜症、心不全、肺動脈血栓塞栓症など、幅広い循環器疾患を対象に、最新かつ、最良の医療を提供することを目指して診療にあたっています。また、循環器専門医を多数在籍（９名）していることを生かして、循環器専門医を有する複数のチームで24時間365日、循環器救急疾患に対応しています。

次に、当科の診療実績についてお知らせします。冠動脈形成術は年間550-600件、末梢動脈疾患インターベンションは年間130-150件、不整脈アブレーション治療は年間約500-550件、ペースメーカー植え込み術は年間130-150件と、大阪でも有数の症例数を誇っております。これらの実績を積み重ねることができたのも、地域医療機関の先生との緊密な連携があってこそと、改めて感謝申し上げます。

さらに、臨床研究にも力を注いでおります。冠動脈治療時に使用する光干渉断層撮影（OCT）の詳細な検討による再狭窄の病態解明や、心筋虚血の病態と冠血流の生理学的評価、ST上昇型心筋梗塞患者におけるパーフュージョンバルーン（血流を維持できるバルーン）とニトロプルシドの注入の有用性についての検討、心房細動アブレーションの治療成績向上を目的とした研究など、幅広い分野において臨床研究を展開しています。また、コロナ禍が明けたことで、海外学会への参加も再開し、2023年、2024年は欧州心臓病学会（ESC）で複数演題のプレゼンテーションをしてきました。このような研究活動の結果、2023年は１年間で約30本にも及ぶ英語論文が海外雑誌にアクセプトされました。今後も、「堺から世界へ」をモットーに、医学の進歩に少しでも貢献できるよう努めてまいります。

これからも地域の皆さまに信頼され、かかりつけの先生がたのご期待に添える病院であり続けるため、努力を重ねてまいります。何かご相談やご紹介がございましたら、どうぞお気軽に当院へご連絡ください。今後とも、変わらぬご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

診療科紹介　心臓血管外科

心臓血管外科部長　近藤晴彦（こんどう はるひこ）

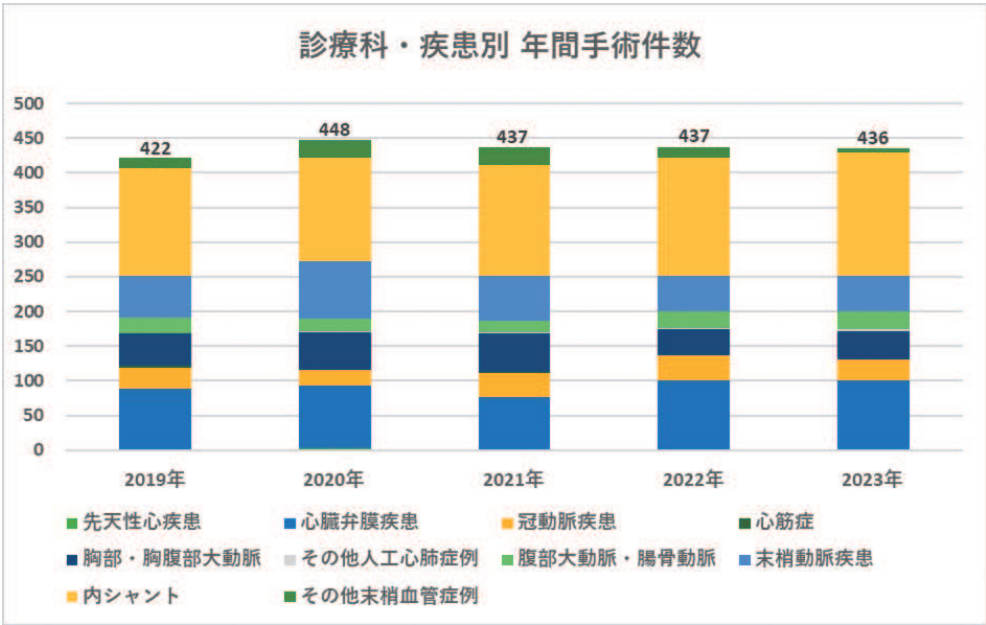
心臓血管外科は、心臓血管外科と血管外科で構成されています。心臓血管外科では、冠動脈疾患（狭心症、心筋梗塞、虚血性の心筋症など）や心臓弁膜症、大動脈の疾患（大動脈瘤、大動脈の解離など）、不整脈（心房細動など）、心筋症など心臓・大血管疾患全般に関する治療を行っています。血管外科では、腹部・四肢における動脈硬化性疾患を中心に、静脈疾患や透析用バスキュラーアクセスに対する診療を中心に行っています。総勢５名の体制で外来・入院診療を行い、年間の総手術件数は、ここ５年間は概ね400件を超えています。

2023年の総手術件数は436件で、弁膜症100例、胸部大動脈疾患41例、冠動脈疾患29例、腹部/腸骨動脈疾患26例、末梢動脈疾患51例、内シャント手術178例でした。これらの疾患に対して、循環器内科や腎臓内科、形成外科や放射線科など様々な専門科と密接に連携して術前診断から治療、術後の管理まで行っています。

当科の特徴は、患者さまの年齢や全身状態に応じて、様々な治療方法を提供できることです。大動脈疾患では、開胸や開腹を伴う人工血管置換術のみならず、ステントグラフトを使用した低侵襲な治療も提供しています。弁膜症では循環器内科をはじめ、各専門の職種で形成する「ハートチーム」でカンファレンスを行い、従来の胸骨正中切開アプローチで行う弁膜症手術、胸骨を切らずに肋間アプローチで行う低侵襲な心臓手術（MICS）、カテーテルで行う弁膜症治療（経カテーテル的大動脈弁留置術（TAVI）など）の中でどの治療が患者さまにとって最もメリットがあるかを安全性・長期耐久性も加味して判断し、ベストの治療法を提供するようにしています。

さらに、術後の管理でも、2023年４月からは集中治療科が新設され、ICUにも集中治療専門医が常勤する体制となり、ますます安全・安心な術後管理が行える体制になりました。

今後も大阪府南部・堺市周辺地域の基幹病院として質の高い専門的な治療を提供していけるよう、スタッフ一丸となって全力で努力いたしますのでよろしくお願いいたします。



診療科紹介　脳卒中・脳神経内科

脳卒中・脳神経内科部長代理　由上（ゆかみ）　登志郎（としろう）

この度、長年、当院の脳卒中・脳神経内科を牽引されていた橋本医師が2024年７月末にて異動となり、後を受けて８月より診療科長となりました由上（ゆかみ）と申します。若輩者ではありますが、何卒よろしくお願いいたします。

脳神経内科は、脳や脊髄、末梢神経、筋肉の病気を内科的専門知識と技術をもって診療する診療科です。

特に当科は、「脳卒中・脳神経内科」と標榜しており、脳卒中に重点をおきながら、神経変性疾患、末梢神経障害、筋疾患に至るまで幅広く診療しております。

常勤医４名は全員が神経内科専門医を取得しており、さらに、昨年度まで当科の副部長であり、現在は棚橋内科・循環器科の副院長としてご活躍中の棚橋貴夫先生に、週２回スーパーバイザーとして来院いただき、各症例について深い議論を行いながら日常診療を行っております。

2023年度の入院患者数は332例（急性期脳梗塞174例、パーキンソン病13例、てんかん22例、髄膜炎・脳炎５例、末梢神経障害４例、重症筋無力症５例、ALS５例、筋炎３例）でした。超急性期脳卒中については脳神経外科と協力して診療しており、rt-PA静注療法16例、血栓回収療法は20例でした。今年度は病院全体として救急疾患に力を入れており、当科における神経救急の入院数もさらに増加しております。

外来につきましては、現在、完全予約制にて運用させていただいておりますが、脳梗塞の疑いなど緊急性のある疾患につきましてはこの限りではなく、症例に応じて緊急対応させていただきますので、患者さまをご紹介いただいている先生方におかれましては、まずはメディカルサポートセンターを通しての問い合わせやご予約をお願いいたします。

当科は今後、さらなる人員の増強を目指し、地域の皆さまにご満足いただけるよう尽力させていただく所存ですので、今後とも何卒よろしくお願いいたします。

診療科紹介　脳神経外科

脳神経外科部長　藤本康倫（ふじもとやすのり）

当院では患者さまの体に優しい脳血管内治療と内視鏡手術を第一に考え、常勤の脳血管内治療専門医１名と神経内視鏡技術認定医３名が専門性を持って診療しています。当科の特徴を３つ挙げさせていただきます；

１）脳血管内治療による脳卒中の外科的治療と予防治療：超急性期脳梗塞治療として経皮的血栓回収術、脳梗塞予防として頚動脈狭窄症に対するステント留置術、くも膜下出血の予防としての脳動脈瘤コイル塞栓術などを行っています。

２）脳腫瘍に対する内視鏡手術：視力低下・視野障害などを引き起こす下垂体腫瘍に対しては開頭手術ではなく鼻の孔を経由する低侵襲な「経鼻内視鏡手術」を、さらには脳深部の腫瘍に対しても内視鏡手術を第一選択として行っています。当院では耳鼻咽喉科・頭頸部外科及び糖尿病内科とも協力し、内分泌代謝科（脳神経外科）専門医を中心に総合的に下垂体腫瘍を診療していることが近隣の脳神経外科施設にはない特徴です。また脳腫瘍を専門とするスタッフが、脳腫瘍の手術の後、患者さまの状態に合わせた最善の方法を選択し薬物治療、放射線治療及び腫瘍治療電場療法なども組み合わせて行っています。

３）特発性正常圧水頭症に対する診断と治療：本疾患は「歩行障害」や「物忘れ」が進行しますが「歳のせい」とされ見逃されることが多いことが知られています。またこの疾患はアルツハイマー病など他の認知症との鑑別が重要であり、最近ますます重要になってきている認知症診療の一端を担うため近隣医療機関と協力しつつ診療を行っています。

近年の脳神経外科は診断手段の進歩と手術方法の低侵襲化によって脳の病気の早期発見と予防手術ができるようになりました。今後も皆さまにおかれましては是非とも「ろうさい病院」脳神経外科を選んでいただきたくお願い申し上げます。

脳血管内治療

経鼻内視鏡手術

新・大阪ろうさい病院　新築工事について

事務局長　庄田元彦（しょうだ もとひこ）

大阪ろうさい病院は、昭和37年４月に開設以来、諸先輩方の真摯な診療姿勢が堺市民の皆さまの信頼を得て、地域の発展とともに成長してきたところですが、およそ50年を経た平成20年代から、建物の老朽化、拡張を続けてきた土地の狭隘化、医療の高度化に追いつけない設備などが目立ち始め、建替えの具体的な検討が始まったところです。

病院の建て替えは、まず旧病院敷地内に併設された看護学校と職員宿舎を近隣の土地に移設新築（平成28～29年）し、旧看護学校等の跡地に新病院を建設することから始まりました。

新・大阪ろうさい病院のコンセプトは、「高度急性期を担うHigh Volume Center（高難度手術の多数例を手術する施設）」とし、将来にわたる堺市の医療需要に応えうる施設とするため、手術室、集中治療室、救命センター、心カテ室、内視鏡センター等を拡張しました。

手術室は16室と３室増としましたが、単に数を増やしただけではなく、医療の高度化による例えばダ・ヴィンチ等の大型の手術機器の導入にも対応できるように一室一室の広さを拡張するとともに、救命センターから手術室への導線、手術室から集中治療室への導線等も考慮した、新病院のコンセプトを忠実に具象化した手術室を中心に病院が機能する設計としています。

また、新病院では駐車場が大幅に拡張されるとともに、南海バスの停留所が病院正面玄関前に設置されるなど、旧病院での課題であったアクセスが大幅に改善されています。

新・大阪ろうさい病院は、多くの方の衆知と汗の結晶として、令和７年１月にグランドオープンを迎えます。

旧病院同様、この新病院が地域医療に貢献し、堺市民の皆様に末永く愛される病院となることを願ってやみません。

診療機能	旧病院	新病院
救命センター	２床	６床
集中治療室	ICU８床	ICU12床
	CCU６床	CCU８床
	－	HCU８床
手術室	13室	16室
心カテ室	２室	３室 （バイプレーン装置２台）
内視鏡センター	５ブース	８ブース （X線透視下専用処置室 １ブース）
化学療法センター	21ベッド	31ベッド （40ベッドまで拡大可能）

独立行政法人
労働者健康安全機構　大阪ろうさい病院
日本医療機能評価機構認定病院
地域がん診療連携拠点病院
地域医療支援病院

〒591-8025
大阪府堺市北区長曽根町１１７９－３
TEL　072－252－3561（代表）
　　072－255－8076（メディカルサポートセンター）
FAX 072－255－8203（メディカルサポートセンター）
https://www.osakah.johas.go.jp/
（病院HP）